

御挨拶

都立武蔵台学園校長 中村大介

都立武蔵台学園のホームページにお越しいただき、誠にありがとうございます。

本校は、昭和 42 年に開校した東京都立立川養護学校を前身とし、東京都立の知的障害教育校としては 4 番目の歴史を有する学校です。

平成 16 年には、現在の府中市武蔵台へ校舎を移転したことを機に、校名に「武蔵台」を冠し、新たな歩みを始めました。平成 24 年には、隣接する都立小児総合医療センター内の府中分教室について、都立東久留米特別支援学校からの移管を受け、知的障害教育部門と病弱教育部門を併置する学園校となりました。

武蔵台への移転以来も、地域のみなさまや関係機関のみなさまに支えられながら歴史を積み重ねており、令和 9 年度には創立 60 周年という節目を迎える予定となっております。

さて、特別支援学校は、児童・生徒の状況を捉え、個別に対応していくことを基本としております。本校においては、個別の対応に注力することに加え、学習集団を導く授業力の更なる向上に励んでおります。

具体的には、「校長が求める授業」として、「本時の学習の流れ、それぞれの活動の手順が明確にされている」「児童・生徒が自分から取り組んでいる」「児童・生徒が待っている時間が少ない」などの 1 2 項目を決め、励行するよう校内に示しています（内容はこの後にまとめましたので御覧ください）。

御来校のみなさまにおかれましても、校内参観の際に、この 1 2 の項目の実現状況を御確認くださいと幸いです。

授業は毎日 5、6 時間あります。よい授業がなされれば、お子さん方の学校生活も格段に楽しくなります。「授業力の武蔵台」を目指す取組に御期待くださいますよう、お願いを申し上げます。



「校長が求める授業」について

この多様性の時代ですので、教員それぞれが自らの個性を存分に発揮することは大切ですが、一方、武蔵台学園として統一感のある授業を行っていくことも重要であると考えております。

そこで、文部科学省が作成している学習指導要領の解説や、国立特別支援教育総合研究所の研究成果を基に、校長がどのような授業を求めているかを、12の項目により校内に示しています。

- 1 本時の学習の流れ、それぞれの活動の手順が明確にされている
- 2 児童・生徒が自分から取り組んでいる
- 3 児童・生徒が待っている時間が少ない
- 4 児童・生徒が意思を表す場面が多く組み込まれている
- 5 児童・生徒の生活年齢に見合った内容が取り上げられている
- 6 言葉による説明や指示が少ない
- 7 話す言葉は、児童・生徒が理解できる言葉である
- 8 立ち位置の最適化を図っている
- 9 児童・生徒に合わせて賞賛し、望ましい行動を強化している
- 10 直接的な支援（介助）を最低限にとどめようとしている
- 11 児童・生徒ができることは必ずやり切るように指導している
- 12 児童・生徒の誤学習を避けるための配慮を行っている

以下に、それぞれの項目について御説明します。

1 本時の学習の流れ、それぞれの活動の手順が明確にされている

児童・生徒それぞれが理解できるような方法を工夫します。「1、2…」と示すだけでなく、上から下、左から右に活動の流れを示すなど効果的な提示を考えます。また、絵カード、写真カード、文字カードなど児童・生徒一人一人に合わせて示していきます。児童・生徒がいちばん興味を示す大きさを示すことも考慮します。流れを示すカードを見せ続けるのか、一旦引いて、また提示するのも工夫します。

2 児童・生徒が自分から取り組んでいる

児童・生徒の興味・関心を捉えた内容にしていきます。もちろん、学習の中で、あまり興味・関心のないことにチャレンジしてもらう場面もあるでしょ

う。その場合においても、児童・生徒のモチベーションを高める工夫を行います。例えば、作業学習であったとしても、黙々と作業を続けることのみを追求するのではなく、生徒が達成感を得て、次時に前向きに向かえるような内容にしていきます。

3 児童・生徒が待っている時間が少ない

短時間待つ、順番を守って待つなど、「待つこと」を意図的に学ぶことはむしろ推奨しています。また、友達の様子を見たり応援したりすることも大切にしていきますが、それが当該の児童・生徒の学習課題として適切であることを前提としています。また、教員による段取りの滞り、教材や用具の不足により待ち時間が長くなるような授業は避けることとしています。

4 児童・生徒が意思を表す場面が多く組み込まれている

児童・生徒それぞれの方法で意思を表出できるような場면을積極的に設けるよう工夫していきます。学習の過程で、一方的な教え込みにならないよう、児童・生徒が教員とコミュニケーションを取れるようにしていくことを大切にしていきます。特に、児童・生徒からの発信を大切にしていくことに力点を置いています。

5 児童・生徒の生活年齢に見合った内容が取り上げられている

児童・生徒の認知発達の状況と生活年齢の間に徐々に乖離が生じていくのが一般的ですが、そうであったとしても、生活年齢を考慮した対応を徹底することを求めています。その上で、実生活で役立つ知識や技能を身に付けられるようにすることを大切にしています。

6 言葉による説明や指示が少ない

児童・生徒の多くは、耳で聞いて物事を理解したり覚えたり身に付けたりすることより、実際に体や目や指を使って操作して学んでいくことのほうが得意な方が多いです。「説明しましたよ、いいですか」という授業は避けることにしています。また、言葉での指示が多い授業は児童・生徒を受け身にさせますので、見てわかって自分で取り組める場面、時間を多くするよう求めています。

7 話す言葉は、児童・生徒が理解できる言葉である

言葉での説明をすべて否定している訳ではありません。ただし、児童・生徒

が理解できる内容の説明になっているのか、また、児童・生徒が一度に言われて理解しきれ分量の説明になっているのかに注意を払うよう求めています。特に前者については、例えばカレンダーの理解ができていない子供に向かって「金曜日だから上履きを持ち帰りましょう」と言うのをやめ、「上履き持ち帰りカード」を帰りの会で示す、あるいは下駄箱のところに「上履き持ち帰りカード」を貼っておくなど、児童・生徒が見て分かって自分から取り組めるように工夫することを求めています。

8 立ち位置の最適化を図っている

教員は児童・生徒にとって学校内での最大の「環境」です。教員が目に入る位置にいることにより、児童・生徒の集中がかえって削がれてしまうことがあります。そのため、この学習を進めていくために、教員はどこにポジションをとるのが最適なのか、常に考えるよう求めています。

9 児童・生徒に合わせて賞賛し、望ましい行動を増やしている

児童・生徒の好ましい行動を増やしていくには賞賛が一番です。児童・生徒の多くは帰りの会でほめても「何のことだっけ？」になってしまいますから、その場で直ちに賞賛することを徹底するよう求めています。また、高等部段階にあっても、ほめることの重要性は変わりません。生活年齢を踏まえ、さらっと賞賛することを求めています。もちろん、「ほめられる」ことの意味がまだ理解できていない児童・生徒には、意味を分かってもらうべく大げさにほめるよう求めています。

なお、好ましくない行動はその場では無視し、次からそうした行動を生まないような環境調整を考えるようにも求めています。（当然ですが、事故につながるような好ましくない行動は無視しないで止めます。）

10 直接的な支援（介助）を最低限にとどめようとしている

どの行動でも一人でできるようになることを目指していきます。よって、極力教員の支援を減らしていくことを意識しています。定着していないのに支援しないと身に付きませるのでそこは支援していきませんが、どこかで支援を減らしていくことも考えていきます。直接的な介助は、児童・生徒の思考機会を減らします。自分なりに見通しを立て、自分から取り組めることを大切にするよう求めています。

もちろん、発作がある児童・生徒、他害がある児童・生徒には積極的に直悦

的な支援を行っていきます。

11 児童・生徒ができることは必ずやり切るように指導している

できることは必ずやり切れるようにと求めています。また、できることであっても、必要に応じて賞賛することも忘れないよう意識していきます。

できるようになると、次第にいい意味で「いい加減」になるのが人の常ですので、そうなったら、できることをより高いレベルでやってもらうよう求めています。例えばですが、歯磨き後のコップを洗う、鞆を棚にきれいに置くなど、細かいことまでしっかりやってもらうことを大切にしています。

12 児童・生徒の誤学習を避けるための配慮を行っている

活動を提示するからには必ずやり切れるようにしていきます。児童・生徒がパニックになったからやめる、という対応が続くと、次々と騒ぎが起こるようになります。

逆に言えば、課題の選択はそれほど大切であり、児童・生徒の興味・関心やこれまでの学習の状況を踏まえた課題の提示を工夫していきます。また、ダメなものはダメと、さらっとかつ毅然と示すことも大切にしています。